
クオイド

kan_sta_ku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クオイド

【Nコード】

N2343T

【作者名】

k a n | s t a | k u

【あらすじ】

ある日、誰かの視線を感じ振り返ると女の子が…

次の日クラスにその少女が転校してきた

問い詰めると……

彼女はフィアンセで魔法使い！？

感想、アドバイスなど待ってます

I PROLOGUE I (前書き)

まだまだ未熟ですがお手柔らかに……

「PROLOGUE」

老人と少女が話している

「争いなんていやですね、起こらないといいですけど…」

「そうじゃのう…シェリス、例の件はどうなった？」

「やっと彼の所在をつかみましたよ。まあ彼は全て覚えてないと思います」

「そうか、とうとう…それにしても良く見つけられたな」

「おじいさま、私は彼の………ですよ？」

「ふお、ふお、そうじゃったの」

一方、二人の男が話している

「とうとうできたのか…JARZIL」

「はい…ですがこいつはまだ“普通の人間”には耐え切れないかと…」

「実用化にはどの程度かかりそうだ？」

「性能を落とせば一週間…しかしこの機動力を維持するとなるとい

つになるか…」

「そうか…」

―第1話―

「はぁ、暇だぁ」

一人の高校生が歩きながら呟く

すると後ろから声が聞こえる

「舞洲夢來^{まいしまむらゐ}…やっと見つけた…」

夢來は声のしたほうを見る

すると少女が路地裏に走っていく

「ちよっ、待てよ！」

夢來は少女を追いかけて路地を見るがすでに少女の姿はない

「まったく、なんなんだ？」

夢來の呟きは路地の静けさに吸い込まれていった…

次の日…

「おはよう夢來」

「おお紅把、おはよう」

彼は古川紅把夢來ふるかわこうはとは小学校から一緒だ

「そういえば夢來、今日転校生がくるらしいぜ」

「相変わらずお前は情報が早いな」

「どうも…だが今日の転校生は妙なんだ」

「妙？」

「ああ。いつもならその転校生のあらかたのプロフィールはわかるんだが、今日の転校生は転校してくるってことしかわからないんだ。調べる手段はまだいくらでもあるが、俺もまだ犯罪者にやりたくねえからな」

「そうなのか…ってかそんな方法を知ってるって…」

「気にしたら負けだぜ、夢來」

「お前なあ…てか俺の隣って席無かったよな、じゃあ転校生はここ？」

そんなやり取りしていると先生が教室に入ってくる

「みんな、今日はこのクラスに転校生が来てます。じゃあ入ってきて」

するとハーフっぽいかわいい女の子が入ってくる

（あれ？あの子昨日の…？）

「瀬戸シェリスです。よろしく願いします」

シェリスはぺこりとお辞儀する

クラスのみんなから歓声が上がる

夢來はシェリスが頭を上げた時、シェリスと目が合う

するとシェリスは夢來にウインクする

夢來は思わず赤くなる

シェリスはそれをみてクスリと笑った

「じゃあ瀬戸は…舞洲の隣に座ってくれ」

シェリスは夢來の隣に座る

「じゃあHRはこれで終わり」

先生は教室から出て行った

シェリスは夢來に話かける

「私はさっきも言ったけど瀬戸シェリスよ、よろしくね」

「俺は舞洲夢來だ、よろしくな瀬戸さ」「シェリスでいいよ」…ああ

分かったシェリス、俺も夢來でいいぜ」

「おいおい2人でなーにいい雰囲気になってんだ？」

「いやいや、そういう訳じゃ…とこっちは古川紅把だよ」

「古川紅把だよろしくな」

「うんよろしく」

そこで1時間目の先生が教室に入って来たので紅把は自分の席に戻った

夢來はこのタイミングを見計らってシェリスに小声で聞いてみる

「そういえばシェリス昨日会わなかったか？」

「アハハ、やっぱりバレてたかあ、放課後詳しく話すわ」

「了解」

放課後：

「学校じゃちょっと話せないかも、ちょうど家空いてるから家でいい？」

「はい？俺は別にいいんだが、会ったばかりの男をそんなに簡単に家に上げていいのか？」

「それは全然問題なしだよ。まあ正確にはあなたならだけど。だつて…まあ家で全部説明するわ」

「つてここ俺の家の隣じゃねえか」

「ふふっ驚いた？」

シェリスは楽しそうに笑う

「じゃあ入って」

「お邪魔します…悪いな手土産なくて」

「いいって突然なんだし、ただいまー」

「お帰りシェリス…あら夢來君連れてきたのね」

「うん」

「どうも、なんか知ってるみたいですけど一応、舞洲夢來です。はじめまして」

「私はシェリスの母のクレアよ、よろしくね」

「じゃあ私の部屋にいるから」

「わかったわ」

「で、何から話そうかしら…そうね、まずさっきの質問に答えるね」

「OK」

「それはね…夢來は覚えてないけど私は夢來のフィアンセだからよ」

「…へっ?…マジ?」

「うん♪」

「し、証拠はっ?」

「証拠かあ…そうだなあ…フィアンセじゃないと会ってすぐ出来な
いってことすればいい?」

「ああ……………!!」

おもむろにシェリスは夢來にキスをする

「……………これで信じてくれる?それともまだ信じてくれない?…」

シェリスは悪戯っぽく笑いながら自分のシャツのボタンに手を伸ばす

「!!…わかった!わかったからストップストップ!」

シェリスは手を止める

夢來はそれをみてホッとする

「じゃあ話を続けるわね、突然だけど夢來は魔術とか魔法って信じる？」

「うーん、信じないこともないかな、科学で証明されてないことを否定するのはどうかと思うし」

「そう、なら話が早いわ、私は魔法使いなの」

「へえーシェリス魔法使いなのかあ…って魔法使いいい!？」

「そうだよ、ほら」

シェリスは人差し指に火を点して消してみせる

「す、すごいな」

「ありがと、夢來♪、でも夢來もなんだよ」

「えっ?でも俺使ったことないよ?」

「本当は使ったことあるんだよ、覚えてないだけで…」

「おれが覚えてないって小さかったからか？」

「ううん…夢來はある人たちに魔術に関する記憶を消されちゃったの、今日家に連れてきたのはその記憶を再生させるためでもあるの」

そこまで言ったところでドアがノックされる

「シェリス、わしじゃ、入るよ」

「うん」

すると1人の老人が入ってくる

「はじめまして、舞洲夢來です」

「ふおっふおっ、そんなにかたくならんでもよいよ、わしはシェリスの祖父のハーライト・シークじゃ、その様子じゃあらかた話は聞いたのじゃな？」

「はい、まだ半信半疑な部分もありますが…でも信じることにします…ただの直感ですが」

「そうか、しかし記憶がなくても、そういうところは変わらんかう」

「ちなみにおじいさまは魔術連合の会長で夢來の師匠だよ」

「す、すごいですね」

「そんなことないよ。では早速始めるとするか。ちょっと、いやかなり辛いと思うが頑張るのじゃぞ」

「はい」

ハーライトは夢來の額にふれ何かを呟く
すると頭にすごい量の情報が流れ込んできて、頭に激痛が走る

「うぐっ！」

夢來は必死に耐える

30秒くらいたち痛みがおさまる

「や、やっと…お、終わった…」

そう言って夢來は倒れる

「夢來！…おじいさま、どうしよう夢來が！」

「大丈夫じゃよ、気絶しているだけじゃ。記憶を取り戻すだけでも負担が大きいのに、彼は魔術に関する記憶全てじゃからの。最後まで耐え切れるとは…さすがじゃの」

「よかったあ」

シェリスは愛おしそうに夢來を見る

それを見てハーライトはそっと微笑み静かに部屋を出て行った

Ⅰ第2話Ⅰ（前書き）

戦闘用駆動機は基本的には戦闘機のようなものと思って下さい

―第2話―

「うう、ううん、朝かあ…ってシェリス!?なんで!?!」

夢來が目を覚ますと、横にシェリスがねている

「ふあああ…あつ夢來起きたんだ、よかったあ…それとなんでは酷くない?ここ私の部屋だし」

「ああそれもそうか…納得出来ないけど無理矢理納得することにするよ…でも俺なら別に床の上でも「それはダメっ!」…はい分かりましたよ…って遅刻ぎりぎりじゃねえか!」

2人はそれから魔術フル活用で支度をして

ぎりぎりです教室に滑りこむ

そこで紅把が話しかけてくる

「夢來が遅刻ぎりぎりなんて珍しいな、なんかあったのか?…それに瀬戸と同時になんてさあ」

「いやたまたまだって」

夢來は笑ってごまかす

そのタイミングで先生が入ってくる

（はあ、よかったこういう時は先生も役に立つもんだな）

「今日から新しい授業が始める。最近物騒でな。国から戦闘用駆動機の実習を命じられた。1日専門施設でこの授業だ」

クラスの一行は専門施設に到着

一人の軍人らしき男がでてる

「皆さんおはよう。君達には戦闘用駆動機について学んでもらう。それでは着いてきてくれ」

男とクラスの一行は建物に入る

少し進むとたくさんの人が一人入れるくらいの機械がある部屋にたどり着いた

「さすがにいきなり本物に乗ってもらうわけではないよ、そこで君達にはこのシュミレーターをやってもらう、それではどれも同じなので好きなシュミレーターに座ってくれ。使い方などもシュミレーターが説明してくれるから安心してくれ」

夢來は紅把とシェリスの隣にすわる

夢來が座るとシュミレーターが起動する

（?…使い方がわかる?）

「射撃訓練プログラム起動ソレデハ…」

シュミレーターが説明しているが、夢來は全く聞いていない…説明中にもかかわらず全ての的に命中させている

「ファーストミッションクリア」

シェリスと紅把が話しかけてくる

「うわぁ夢來すごい」

「夢來はやっ」

「そんなことないよ」

夢來は飛行訓練で指定ポイントをもつすごいスピードで確実に通過しながら答える

いつの間にか夢來の周りには人だかりが出来ている

「君すごいね、名前は？」

「舞洲夢來です。お兄さんの名前は？」

「!!!：ハハハ、俺はもうおじさんだよ。俺の名前は浜野相馬だ」

相馬はにこやかに答えるが、夢來は夢來の名前を聞いて一瞬うろたえたのを見逃さなかった

「では舞洲君、君実際に乗ってみるかい？」

「いいんですか？」

「ああ、君は見た所うちの新人よりは上手いからね、それではみんなもいこうか」

クラスの一行は外に向かった

一方ある廃空港で

「今こそ我らの力を軍に見せ付けるときだ…みんな、行くぞ！」

その一声を合図に10機の戦闘用駆動機が飛びたった

その頃夢來は空にいた

夢來は華麗なアクロバットを決める

クラスのみんなから歓声が上がっている

しかし夢來の機体のレーダーに10機の機影が映る

そこで施設の警報が鳴る

「みんな早く建物の中へ」

相馬はクラスのみんなを避難させる

「チームA、チームA出撃用意！反乱組織だ…くそっ早くしろっ！間に合わない！」

ミサイルがクラスの列に向かって飛んでくる

「くそっ…どうしたら」

相馬が呟いた瞬間ミサイルは爆発し、被害はない

「大丈夫ですか」

夢來から無線が入る

「ああ助かったよ、君も早く避難「出来ませんね」…えっ？」

「友達を攻撃したやつを許せないし、それに今ここを守るのは俺だけですから」

「舞洲君無茶だ相手は10機だぞ！すぐに下りろ！」

しかし夢來は聞かずに行ってしまう

「とりあえず数を減らす」

夢來はブーストを上手く使いホバリングし次々に打ち落とす

「あと半分！…らちがあかない！使いたく無かったけどしかたない」

夢來は残りをロックオンしミサイルを発射する

5機は散り散りになりそのうち4機は墜落する

色の違う青い1機だけが地形を上手く使いよける

（あいつがリーダーか）

夢來は急接近する

無線で敵に話しかける

「もう止めてくれ！」

「少年？、なぜ少年が？」

敵は夢來に追尾ミサイルを撃ってくる

「くっ」

夢來は振り切ろうと飛ぶがかわしきれない

「こうなったら」

夢來は敵の後ろにピッタリとはりつき機関砲でエンジンを狙い撃つ

敵機は煙を上げゆっくり落ちていった

ミサイルは夢來の機体にぶつかる直前にコントロールを失い爆発した

「ふう…助かった」

その後施設の近くで10人全員が逮捕された

機体は粉々だが彼らはなぜか無傷だったらしい

「本当に助かったよ舞洲君」

「いえ、大丈夫ですよ」

クラスみんなはもうすでに帰ってシェリスが待っている

「では僕も帰りますね」

「ああ、じゃあな」

夢來はシェリスと帰っていく

それを相馬が後ろから見送る

「舞洲夢來…いやまさかな、そんなはずは…」

相馬の携帯のディスプレイ…

！・！・！・！・！

10年前、極秘機動体制実験

舞洲夢來…処分…

l・l・l・l・l

相馬の呟きは夕焼けの空に消えていった

1 第3話 変わらぬ日常と…1

「シェリス、早く学校いくよ」

「うん！」

シェリスと夢來の2人は学校に向かって歩いていく

教室に入ると紅把が来ていた

「おはよう紅把！（古川君）」

「よう！新婚さん！」

「あいな…」

「そ、そんな…新婚だなんて／＼／＼」

「おいシェリスー戻ってこーい」

「瀬戸…完全にトリップしてるな…」

昼休み…

「夢來、弁当一緒に食おうぜ！」

「いいよー」

「私も一緒にいいかしら？」

「瀬戸も？ いいんじゃない？ なぁ夢來」

「あぁもちろん」

3人は一緒に食べ始めようとする

「ん？」

「どうしたんだ？ 夢來？」

「あの子なんで弁当も出さずに一人で座ってるんだ？」

女の子が教室の端で一人で座り悲しい顔をしている

「あれたしか外堀久美だよな？」

3人は久美に声をかける

「外堀さん？」

「はい？」

「何かあったのか？」

「な、何でもないです…何でも」

「そんなはずないだろ…弁当も出さずにそれに1人なんて。君が良ければ話してくれないか？」

「でも…いえ、わかりました、実は…」

久美は周りのやつからイジメられ、今日の場合は弁当を取られ捨てられてしまったらしい

「そうか…じゃあとりあえずこれ食べな？」

「でもそうしたらあなたのが」

「いいから気にすんなって…ああ、俺は舞洲夢來だよ」

「俺は古川紅把だ」

「私は瀬戸シエリスよ。よろしくね」

「はい、私は外堀久美です。でも舞洲君のお弁当もらうのは…」

「大丈夫だって、それと何かあったら俺たちに頼ってくれていいよ。なあ2人とも」

「ああ、今日から俺たちは仲間だ」

「うん、それに夢來の弁当なら大丈夫よ。私作って来ちゃってどうしようか困ってたから」

「ありがとうございます。舞洲君、吉川君、瀬戸さん」

放課後：

「シェリス、帰ろう」

「うん」

2人は通学路を歩いていく

「外堀さん礼儀正しい人だったね？」

「そうだな…というか何で俺の弁当作って来てたんだ？」

「そ、そりゃあ夢來のフィアンセだからに決まってるじゃない／＼
それとも嫌だった？」

「いや、むしろ嬉しいよ。シェリス料理上手いし」

「でも、夢來も料理上手いじゃん」

「いやシェリスも十分上手いって」

「じゃあ明日も作ってくるね♪」

「おう、楽しみにしてるよ…じゃあここでさよならだな…といって
も隣だけど」

「そうね、じゃあまた明日ね」

「ああ」

夢來はシェリスが家に入っていくのを見送り、自分の家に入ろうとする

しかし、その時…

『ガン！』

「うっ！」

（なんで気配が読めなかった…腕が鈍ったか…）

夢來が最後に見たのは知らない男だった…

Ⅰキャラ設定Ⅰ（前書き）

今のところ新キャラ登場とともに更新するつもりです

ーキャラ設定ー

舞洲 まいしゅう 夢來 むらい

16歳

本作の主人公

かなり強力な魔術師だったが、少し前まで何者かによって魔術に関する記憶を消されていた

現在は許婚のシェリスの祖父であり、師匠であるハーライトのおかげで記憶を取り戻した

戦闘用駆動機の操縦もなぜか初めてなのにかかなりの腕なのは何か理由が？…

瀬戸 シェリス

16歳

本作のヒロイン

夢來やハーライトほどでもないが強力な魔術師

記憶を失い失踪していた夢來を探し出した

夢來とは許婚である

古川 ふるかわ
紅把 こうは

16歳

夢來の親友

初対面でも目上の人以外は基本的に苗字を呼び捨てで呼ぶ

やたら情報収集に優れている

外堀 そとぼり
久美 くみ

16歳

周りのやつらにイジメられていたが夢來たちに声をかけられそれ以来仲良くなった

だれにでも礼儀正しい

瀬戸 クレア

40歳

シェリスの母親

いつも笑顔で優しいが魔術の腕はかなりのものらしい

ハーライト・シーク

年齢は謎

クレアの父親で夢來の師である

魔術に関してハーライトと対等に戦えるのは弟子の夢來くらいしかないと言われている

素性などは謎に包まれている

浜野 はまの
相馬 そうま

54歳

戦闘用駆動機のパイロット

長年の経験と知識で現在も部隊のリーダーでありエースでもある

夢來の過去を知っている？

―第4話―

「瀬戸？どうだ？」

「ダメね繋がらないわ」

「舞洲さんどうしたんでしょか…」

紅把、シェリス、久美はいつもどおり学校に来ている

しかし、夢來の席だけが空いている

しかも夢來と連絡が取れないのだ

その頃……

「おい！舞洲君！しっかりしろ！」

「うつ、うつ…あれ？………浜野さん？」

夢來は目を覚ますと目の前には相馬がいた

「ここは？」

「ここは君たちが前に来た施設の牢屋…まあもとはスクラップ処理倉庫だからガラクタがそこら中に転がってるがな」

「牢屋？何でそんなところに浜野さんがいるんですか？」

「それが、最近上の連中の様子がおかしくてな…突然こんなところにぶち込まれたんだよ」

相馬は呆れたように笑う

「そうだったんですか…どうやってここからでますかね？」

「ああそれなんだがな、君というイレギュラーがやってきたことでなんとかなる…いやそれどころかこの施設を吹き飛ばせるかもしれないぞ」

相馬はどこか楽しそうに笑うが急に暗い顔になる

「その前にある実験について話さなくてはならないな…」

12年前…

「夢來の様子はどうか？」

2人の男が話している

1人は今より若い相馬だ

「健康そのものだよ」

「そうか…本当にこの子は体が丈夫だな。あれだけの機動力の負荷に耐えられるとは…考えられんな」

夢來は軍の研究所でどの程度の負荷に耐えられるかの実験にかけられていた

しかし次の瞬間：研究所が爆発した

研究所にいた人は全員無事だった：夢來を除いて：

夢來は跡形もなく消えてしまったのだ

後から夢來に不正に手術が行われていたことがわかった。この手術により体の強度向上、戦闘用駆動機についての情報組み込みが行われていたのだ

「：ということがあったのだ。資料には君は死亡となった。しかし現にここに生きている。それと手術については俺も知らなかったのだ、すまない。」

「まあその実験に関しては分かりました。それに手術によってのデメリットもないようなのでいまさらいいですよ。しかしそれがどう関係が？」

「そう焦るなって。まだ話は終わってないぞ。また年がかわり5年前になる。俺は最新型機の開発に関わっていた。そして試作機が出来た。しかし機動力を優先した余り人間には耐えられないものになってしまった。実用化を目指したが上手くいかなくて結局廃棄処分となった：そしてここは3年前までスクラップ処理倉庫だ：ここま
でいえばわかるだろう？」

「

「なるほど…そういうことですか。なら」

「探しますか!」

学校、放課後…

「しょうがない、ちよつくら危ない橋を渡るしかないか」

「おっ、古川君、そうこなくちゃ!」

「す、すごいですね…」

紅把はそういつてノートパソコンを取り出し、操作し始める

10分後紅把の手が止まる

「何だ…これ…」

ディスプレイには機動力耐性実験について書かれていた

「そんな、夢來が…」

「ひどいですね…これ…実験ならまだしも手術なんて…」

「ああもうやめだ!今は夢來を探すのが先だ!」

紅把はまた操作し始めた

3人は何ともいえない沈んだ雰囲気になってしまった

「こいつはJARZILって名前がついてる。こいつは機動力だけじゃなくていろんな機能が追加されてる。それにしてもずいぶん綺麗な状態で残ってたな」

「そうなんですか…浜野さんの機体はどこら辺ですか？」

「あいつらもバカでね、ちょうど左の壁をぶち抜いたとこなんだよ」

「そりゃまたわかりやすいもんで…じゃあとりあえず乗りますね」

「ああ」

夢來はJARZILに乗り込む

そして自分の感覚に任せて起動させる

「ナビゲーションシステム…起動」

「やあ、君がパイロットだよね？」

夢來はいきなり誰もいないはずのコックピットで隣からいきなり声をかけられ驚きつつ、声のほうを見ると自分より1、2歳年下のような女の子がいる

「あ、ああそうだよ、君は誰？」

「JARZILのナビゲーションシステムだよ」

「そ、そうか…俺は舞洲夢來だ、よろしく」

「よろしく夢來お兄ちゃん♪」

「お兄ちゃん!？」

「嫌なの？」

彼女が上目遣いに尋ねる

「い、いや。好きに呼んでくれ」

「やった！」

その子が抱き着く

「!…：触れるのか…：そういえば君、名前は？」

「夢來お兄ちゃんがつけるんだよ？」

「そうか…：じゃあ、ルナはどうだ？」

「うん！わかった私はルナね！」

「おう、じゃあ早速戦闘開始だ、基本非殺傷でいくよ」

「はい」

とりあえず夢來は左の壁をレーザーで穴を開ける

するとそこはたくさんの戦闘用駆動機があつた

そうこうしているうちに相馬も自分の機体に取り込んだようだ

「夢來君グッジョブだ、こっからは俺の後ろ着いてきてくれ」

「分かりました」

夢來は相馬の案内で施設を出る

施設を出ると砲台から攻撃を受ける

「夢來君、攻撃に構うな！とりあえずここから離れるのが優先だ！」

「分かりました！」

2機は上手く攻撃をかわしながら施設から遠ざかる

すると施設から5機の戦闘用駆動機が出てくる

2機はさらに逃げる

夢來は本気を出せばすぐに逃げられるが、相馬を置いていくわけにもいかないので相

馬のスピードにあわせる

「夢來お兄ちゃん！ロックオンされてるよ！」

「くっ！」

夢來は回避行動に出るがなかなか上手く避けられない

もう少しというところでJARZILからレーザーが後ろに発射されミサイルを撃ち落とす

「ははっ、どんなもんだい！」

「ルナ、ありがとう、助かったよ」

「えへへえ」

ルナは褒められたのが嬉しいのかご機嫌だ

「夢來君！あいつらどうにか出来ないか？」

「なんとかやってみます：ルナ？なんかいい方法無いかな？」

「じゃあルナのとっておき1を使っちゃおう！…えい！」

するとJARZILの形が変わり戦闘機型から球体になる

「な、なんかめっちゃくちゃな機能だな」

夢來は変則的に動き次々に敵機を無力化し、相手は撤退していった

「夢來君よくやった」

「どうもです…浜野さんはこれからどうするんですか？」

「俺には隠れ家や知りあいのつてがあるから大丈夫だ心配いらんよ…じゃあまたな」

相馬は1回アクロバットしてから颯爽と飛び去っていった

「そういえばJARZILどうしよう…置く場所ないし見つかると思面倒だな」

「それなら大丈夫だよ。とりあえず最初に…ステルスモードオン！…よしこれで周りの人には見えないから下に降りても平気だよ」

夢來は戦闘機型に戻ったJARZILを家の近くの広い空き地に着陆させた

「それで？どうしたらいいんだ？」

「私に任せて、夢來お兄ちゃんは降りて」
夢來は地面に降りた

するとJARZILが光ったかと思うと光がおさまりそこにはルナがいた

「おーい夢來お兄ちゃん！」

ルナが手を振りながらテコテコ走ってくる

「！…！…どういことだ？」

「これもJARZILの機能なんだよ、夢來お兄ちゃん以外は私に触れられないよ、それとスペースがあればまたいつでもJARZILを出せるからね」

「そうかとりあえず大体理解した：まあルナは家に来るしかないだろうし、とりあえず改めてよろしく、ルナ」

「うん♪」

Ⅰ第5話Ⅰ（前書き）

更新遅れた上に短めですいません

―第5話―

「ここが俺の家だよ」

「わーい！着いた着いたあー！」

夢來は鍵を開け入ろうとノブを回す

「ん？……ルナ、ちょっと下がってて」

「？…はーい」

夢來はルナが下がったのを確認すると、勢い良くドアを開け放ち、ノブを開けたのと逆の手を前に突き出す

するとまばゆい光を放つ光が家の中から飛んで来た

夢來の突き出した右手には黒い盾のような物が展開され光を受け止める

「うっ！！」

光はゆっくりと盾に吸い込まれていった

「はあ…やっぱこれは戦闘向きじゃないな…」

夢來の受け止めた方の手と腕はあちこち傷が出来、血が流れている

「あっ…ああ…夢來？」

中から声が聞こえる

「そうだよシェリス」

そして中からシェリスが飛び出してきて夢來に飛び着く

「ただいま……シェリス」

「し、心配したんだからあ……うっうぐっ……うう」

夢來は泣いているシェリスを血が出てない方の手で抱きしめる

「ゴメンな……」

「あの……」

ルナが遠慮がちに声をかける

「?……夢來、この子誰？」

「私はルナっていうんだよ! 夢來お兄ちゃんに名前着けてもらったの!」

「ふーん、私は瀬戸シェリスよ……夢來ってそういう趣味が……」

「ちっ、違うよ! ……彼女は戦闘用駆動機のナビゲーションシステムなんだ、ここまで帰って来られたのもルナのおかげなんだよ?」

「そっ、そーなの!？」

「はいっ！私はJ A R Z I Lのナビゲーションシステムです！よろしく願います！シェリスお姉ちゃん！」

「お姉ちゃんかぁ…うん！よろしくねっ！ルナちゃん！」

2人はさっそく意気投合したようだ

シェリスはルナの頭を撫でた

「あれ？俺以外は触れられないんじゃないかなかったか？」

「ああ言い忘れてました、使用者の一番信頼している特別な人には触れられるんです」

「そ、そうなのか／＼／＼……」

「夢來ったら／＼……」

夢來とシェリスが思わず赤くなる

「あの…夢來お兄ちゃん？」

「ん？何？」

「その腕……大丈夫なんですか？」

「「あっ……」」

「もしかして忘れてました？」

ルナが呆れて聞く

「ご、ゴメン…すぐ手当てするからっ！」

「お、おう」

30分後

3人は夢來の家のリビングにいた

「あの…夢來？」

「ん？どうした？シェリス？」

「…その…夢來がいなくなつて…紅把が調べて…」

「ああ…そのことか…聞いたことによるとな…」

夢來は基地で聞いた事をシェリスに話した…

「そっか…」

「俺のこと嫌いn」そんなこといわないでっ！」「え？」

「そんなわけないでしょ！？…夢來がどんな存在でも、夢來は夢來じゃない！…それ以上でも以下でもないわ！」

「そうですよ、夢來お兄ちゃん。シェリスお姉ちゃんの言う通りです」

「……そう…だな……うん、ありがとう2人とも」

「当然よっ!」

「はいですっ!」

そして突然シェリスは立ち上がる

「よしっ、暗い話しはこれでおしまいっ……それよりルナちゃんはどこに住むかを決めなくちゃ……って言っても普通に考えて夢來の家かな」

「まあそうなるかな、それとも男の俺よりシェリスがいいか?…どうする?ルナ?」

「そうですね……うーん……私には決められません」

夢來とシェリスは顔を見合わせる

「どうする?シェリス?」

「うーん…何かいい案は………そうだ!私がこっちに住めばいいのよ!夢來は元々一人暮らしだし部屋も余ってるし問題なしっ!」

「……………えっ?ちょっ「わーい!これでみんな一緒ですね!」聞いちゃいないし…………」

シェリスとルナは小躍りして喜んでいる

「……まあ…いつか…」

夢來ははしやぐ2人を見て、静かに微笑んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2343t/>

クォイド

2011年10月9日02時50分発行